

「北風と太陽」

冬の寒い日が続くころ、世の中には からからに渴いた冷たい風が吹きすさび、たまに 弱々しげな太陽の光が、一息つかずにいられない地上のために 風の間と間に ちょっとだけぬくもりを投げかけるような…、そんな ある日。



びゅうびゅう暴れまわって やたら元気な北風と 夏の間 目いっぱい働いて 少々眠たげなお日様が、じつは どっちが強いのか について 話しあうことができました。

北風は ものすごい勢いで 冷たい 凍るような息を あらゆるものに吹きかけてかっちゃんかちんにしたり、その痛いようなすさまじい勢いで あたりものを とんでもないところへ吹き飛ばしたり、何もかもを冷たく深く眠らせたり、ひょっとすると 生きているものの命も奪ってしまうことができたので、北風は 自分の強さに だいぶ自信があったのです。

お日様は、考えました。

私は いくら一生懸命 地上のものを照らしたとしても、何かがそのために勢いよく吹き飛んだり、あるいは溶かすことはできても かっちゃんかちんに凍らせえたり、とんでもない遠くへ 何かを飛ばすなんてことはできないな。

暑さで 山火事を起こしたり ものをからからにしてしまうことはできるけれど、どうなんだろう？ 今は とくに 北風さんのほうが つよいのかなあ…、

ところで、そうやって 北風さんとお日様が あれやれこれやれと話し合っているちょうどそのとき、ひとりの旅人が 冷たい道を だいぶつらい思いをしながら やってきました。

「そうだ！ いいことがある。」北風さんは言いました。

「ひとつ ためしに こういうことをやってみようじゃありませんか。

あそこを通る旅人、あの男の着ている外套を 私が吹き飛ばしてやりましょう。

お日様には なかなか できないことでしょうから、私にそれができたらわたしが おひさまよりも強いってことになりますね？」

そして 北風は その冷たい氷のような息を 鋭く 強く ひとりで広い枯れ果てた草原を歩いている旅人に向かって いきなり吹きつけ始めました。

「やあ！ どうしたことだ！ いきなり 風が強くなってきたぞ。いやはやこれでは 先へ進めないし、どうにも寒くて仕方ない。」

旅人はそういうながら、一生懸命 帽子を手で押さえ、外套の前をかき合わせました。

「それ！ もうひと吹き！」 北風は むきになって なおも吹き付けます。

しかし、北風が その冷たい息を吹き付ければ吹きつけるほど、旅人は なおも しっかりと帽子を深くかき、また それが飛ばされないように 首巻でくくりつけたり、外套の襟を立て、体を丸めて できるだけ風を受けないよ

うに工夫するなどして、風が吹くたびに もっともっと必死になって 外套を体から離さないようにしようとします。

北風は これでもか と 散々に強い息を吹きつける、旅人は ぎゅうっと外套を体に押さえつける。。こんなことの繰り返しで 一向 外套は吹き飛ばされそうにありません。

しばらくして、もうこれ以上は続かない というほど、息を吹き続けた北風は、真っ赤な顔をしていました。「もうだめだ！これ以上は ふきつづけられない！やあ なんて 頑固な旅人なんだ！」

それまでの様子を じっと見ていたお日様は「では 私の番だね。さあて どうなるかな・・・？」
といて 風の途絶えた広い草原に へとへとになってたたずんでいる旅人に向かって、暖かな光を さんさんと注ぎ始めました。

「あれ？風がやんだと思ったら、どうだろう？このあたたかさは・・・！まるで 春が来たみたいだ。やあ これは ありがたい！さあ いまのうちに できるだけ先まで歩いていこう。」

旅人は そういいながら、帽子を押さえていた首巻を取り、それを手にもって 元気よく歩き出しました。

お日様は ニコニコしながら 旅人の上に なおも 暖かな光を投げかけます。

しばらくいくと 旅人は あまりの暖かさに うれしくなって口笛を吹き、足取りも軽く すこしずつ速さを増して 歩くようになりました。

北風は すこし心配なきもちで それを見ていましたが、お日様は そうか そんなにうれしのなら もう少し、と それまでよりも もっと 明るい日差しで 旅人を照らしました。

「いやあ！これは ほんとに ありがたい。しかし なんとという今日の天気だろう。いやいや とにかく 暑いほどになってきたからには、上着を脱いで歩かなくては きているものが 汗でびしょびしょになってしまう。」

ついに 旅人は、その外套を脱ぎ、シャツの前を開き、袖とズボンのすそを捲り上げて 陽気な歌を歌いながら 元気な小走りで 向こうへ行ってしまいました。

「さあ、北風さん。どうですかね？あなたが あんなに懸命になって 強くて鋭い息を吹きつけても 一向 外套を手放さなかった旅人が、私が にこにこして沢山の光を投げかけただけで、外套どころか シャツの前をあけたり 袖をまくったりして、すっかり元気になって 旅を続けるようになってしまいましたよ。」

すっかりしよげ返った北風は 情けない顔をして 何も言うことができずに、ちいさくなって すこすこ 北の空へ帰っていったということです。